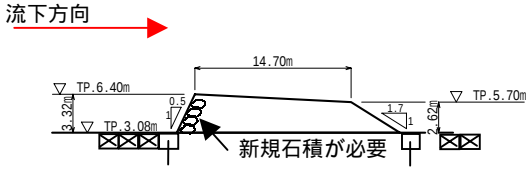
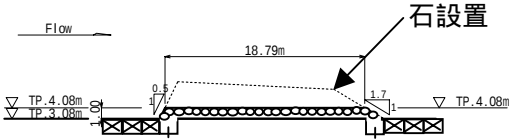
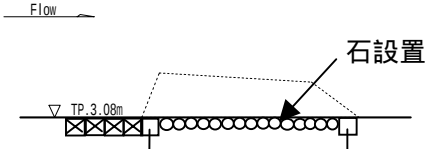


実験の概要と二の荒手委員会での整理の概要

【実験の概要】

- 実験の条件
 - ・ 二の荒手の形状は3 ケースを考え、百間川に旭川から河川改修の計画流量である 2,000 m³/s の洪水が流下したと想定した。
 - ・ 現状のままでは洪水時に崩壊すると予想されるため、真詰め等による補修を前提とした。
- 実験で測定した数値
 - ・ 二の荒手周辺の水位・流速
- 実験のケース

ケース	模型写真	断面図
現状のものを補強		
一部切り下げ (高さは1 m) 高水敷部分は 現状のまま		
全部切り下げ 高水敷部分は 現状のまま	 高水敷 流下方向 高水敷	

ケース	実験の状況	長所	短所
現状のものを補強		・外観上は現状の二の荒手のまま。	・H W L を 4 0 c m 程度超える箇所が出てくる。 ・石組みの間を真詰めし補強するため、昔のように草が茂ることは無くなる。 ・二の荒手周辺の流速が早くなり、周辺の堤防の危険度が増す。 ・二の荒手が決壊すれば百間川への分流量が想定以上に増加し、下流の危険度が増す。 ・治水・利水上必要な施設とは考えにくく補強のための財源負担先の検討が必要。
一部切り下げ (高さは1 m) 高水敷部分は現状のまま		・外観上、低水路部分も二の荒手の形跡が分かりやすい。 ・治水上支障にはならない。 ・河道の安定に役立つ施設と考えることは可能であり、河川工事で対応することは可能。	・外観上、現状の二の荒手とは異なる。
全部切り下げ 高水敷部分は現状のまま		・治水上支障にはならない。 ・河道の安定に役立つ施設と考えることは可能であり、河川工事で対応することは可能。	・外観上、現状の二の荒手とは異なる。 ・低水路部分は二の荒手の形跡が分かりづらい。

HWL：ハイウォーターレベルと読み、治水計画の基本となる高さです。堤防の高さはこの高さに一定の余裕を持った高さに作ります。